



TITLE:

ヨーロッパの畫帖

AUTHOR(S):

上田, 穰

CITATION:

上田, 穰. ヨーロッパの畫帖. 天界 1932, 12(135): 206-225

ISSUE DATE:

1932-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161987>

RIGHT:

ヨーロッパ畫帖

上 田 穰

編輯者の御好意に甘んじて、アメリカ畫帖の姉妹篇としてこのヨーロッパ畫帖を御披露するところであります。但しアメリカ畫帖はその當時貼り付けて置いた寫眞帖から文章もその儘推敲を経ずに載せたもので、多少共ナイーフの感じが味つて頂けたと思ひますが、これはやがて記憶もうすらぐ今日此頃寫眞集から選り出したものでこの點少々恐縮に思ふ次第であります。

1931年1月16日 サザンプトンに英國の土を踏んで以來、4月18日ナポリ港から伊太利の土地に別れをつけるまで僅かに丸三ヶ月の歐洲滞在であるので訪ねた天文臺の數も少なかつた。歐洲で一番最初に訪れたのはグリニッチ天文臺である。

グリニッチ天文臺 (英國)

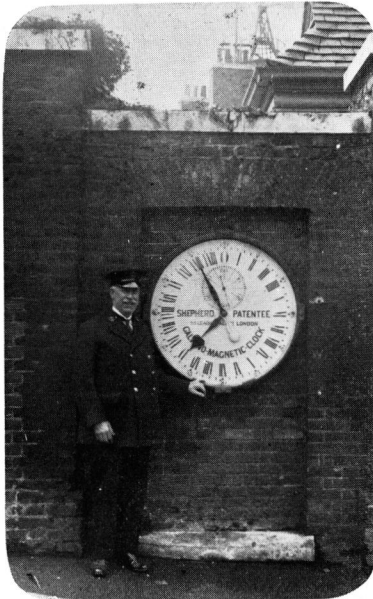
天文臺を訪ねたのはロンドンでも西東が少々わかる様になつた1月の末頃だつたと思ふ。自分達のゐたハムステドからグリニッチまで相當の道程であるが、例の二階つきのバスで出掛けたものである。寫眞にあるこの門番子が

特長あるグリニッチのドーム



受附けてから應接室へ案内せられたが直ぐ臺長が來られて今出掛けるところだからといつてチエンバレンといふ人に案内を託せられた。随分詳しく案内せられたがアルタジマスのグロテスクな姿や、子午環の古色燦然たるもの、

又ブラドレーの使つたといふ望遠鏡，ハリソンの船形のクロノメートルなど皆由緒のあるもので嬉しく思つたことである。歴代臺長の肖像を飾つた會議室へいつた時臺長が歸つて來られたが，編曆局も見たいと話すとわざわざ御自分で案内せられたのには恐縮したところである。又連れ立つて歸られ招ぜられる儘に御茶をおよばれした。臺長官舎は天文臺の他の建物に並んでゐて表には今もゆかしくフラムスチード・ハウスと出てゐる。臺長が夫人を紹介せられる際はレーダー・ダイソンといはれたので成程 Sir Frank Dyson の夫人は Lady Dyson といふのだなと思つたことだが，お茶の話の間家内はすぐ Mrs. Dyson といふので閉口した。



正門前の標準時計



本初子午線を挟んで

何といつても一番一般人に興味深いのはグリニッチが子午線の基準になつてゐるといふ點である。學生時代に誰からか聞いてゐたのでは何でも子午環室から鐵のレールがあるといふことであつたが實際は二三メートル程の長さに石に筋を堀つたものであつた。誠にもつて田舎くさい寫眞であるが私には好個の紀念で東西兩半球に立つてゐるところを御目止められたい。これで私の方が東半球にゐる譯である。

グ
リ
ニ
ッ
チ
天
文
臺
本
館

海 軍 編 曆 局 (英 國)

寫眞はグリニッチ天文臺から遠望した海軍大學の建物で、編曆局はその一部に間借してゐるといつた有様である。主任のコムリー博士にはその節初め

海
軍
編
曆
局

てお會ひしたが耳が大層遠く且つ足が不自由で御氣の毒に思はれた。計算のため色々の計算器械を備へてをり、殊に Burrough 形の印刷式計算器はその優なるものであつた。特に一人の計算手を呼んで實演して見せて呉れたりした。私には非常に親しみ深く感ぜられた人である。

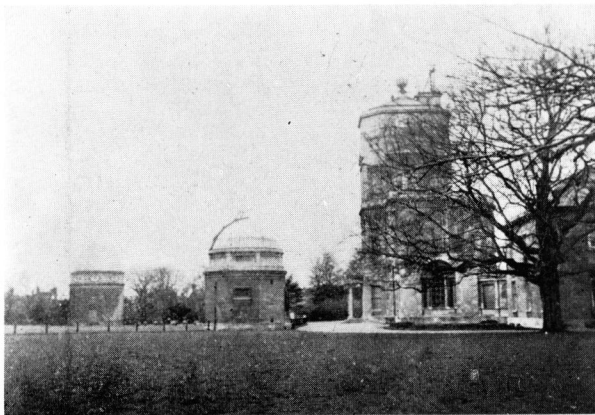
ケンブリヂ大學天文臺 (英 國)

ケンブリヂ行きには色々道があるが シャラバンが一番氣持がよいとのこと

で Varsity express といふのを取つた。大學のあるところから天文臺までまた一寸あるので自動車をかつたが向ふについた頃生憎 ボツボツ降り出して終つた。先づエデントン氏の官舎を訪れると心よく自室へ通されてゆつくり話を始められた。以前何かの寫眞で見た横顔から受けた印象とは全然違つて實になごやかな好紳士と見受けられた。一寸床次さんの様な面ざしがある。餘り御邪魔してもと思つて一應天文臺を見せて頂く。即ちすぐ廊下で天文臺へゆき、更らに極軸望遠鏡など見せられた。それから天體物理天文臺の方へ案内されて、丁度ストラットン氏はお留守であつたが案内を頼んでくれるといふ譯で全く恐縮した次第である。そこではハギンスのスペクトログラフなど珍らしく見、新しく出來たキャロル氏の微光度計など見せて貰つた。バトラー氏が大學の方へ講演をきゝにゆくといふので連れ立つてゆき大學構内を引つ張り廻されたが、雨の中で少々恐縮したことである。

ラドクリフ天文臺（英國）

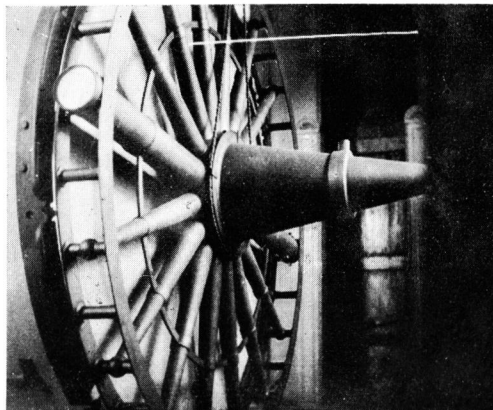
オクスフォードへも矢張りオクスフォード・ストリートから出るシャラバンで出かけたのである。暫らくロンドン市内にくすぶつてゐたので田舎道をドライブするのが心持ちよかつた。臺長の Knox-show 氏には前にお會ひし



ラ
ド
ク
リ
フ
天
文
臺

てゐたので、訪問した際には臆怯な初対面の挨拶ぬきで氣樂であつた。最初天文臺に棟つゞきの官舎の方へお訪ねしたが廊下傳いで天文臺の方へ導かれ

不自由な足にも拘らず本館の上まで案内せられた。そこにはハーシエルの反射鏡など時代めいたものが並べあつた。圖の右方高いのが本館で建築は相當凝つたものである。左方の小さく見えるものは新しいドームで、その床の上下運動は上水道の壓力で極く手輕であつたとて大分御自慢の様であつた。



Jones mural circle

色々見せて貰つた中でこの觀測器械など一寸異色のあるものと思はれる。名前は實際聞き忘れたが、これが Jones の mural circle といふものと思はれるがこれから子午環に進化したことが容易に想像せられる様に思ふ。一寸暗い部屋だつたので心配だつたが案外うまくとれてゐるのが嬉しい。なほこの外本館にあつたもので zenith sector といつて Bradley が章動の觀測をしたといふ器械なども眼底に残つてゐるものゝ一つである。

オクスフォード大學天文臺 (英國)



オクスフォード大學天文臺

前年ターナー教授が亡くなられた後で當時は臺長がなかつた。ケンブリヂのスマート氏が跡をつぐのかなどと一寸噂さに聞いてゐた。

出掛けていつた日はもう大分遅くなつてはゐたが、誰か居残つてゐやしないかと判りにくい大學

構内にある天文臺までいつたけれども誰もゐず、結局寫眞丈け撮つて歸つたことである。フォザリングム氏も當時病氣で引籠つてゐて、宅まで来てくれれば一寸はお會ひが出来るがといふことではあつたが其機會も得ずに終つた。

皇立天文學會クラブ

皇立天文學會のことは周知のことであるが同名のクラブの存在は餘り今迄話を聞いてゐず初耳であつた。2月13日皇立天文學會の年會があつたので丁度好い機だと思つて出掛けていつたが、この日ド・ヂッター教授に金牌と、トンボー君に銅牌授與の式があり會長クロンメリン博士のそれに關する告辭があつた。又役員選舉や新會員の署名の式など如實に見て面白く感じたことである。會後クリテリオン・レストランでその皇立天文學會クラブなるものが催された。このクラブの會員は極く限られた人数の人々で現にクロンメリン氏も會員ではなく、ド・ヂッター博士代理としての和蘭大使それに私などと同じく御客として出たのであつた。このクラブは1820年の創立で當夜は正に第836回目のデナーであつた。しかも同じレストランで催されるといふ由緒つきのもので献立の殆んど魚ばかりなのは創立當時の世話役が老人で齒がないためであつたとか色々説明をきかされたものである。それから陛下の萬歳を祝つてから赤い酒をのむ——のだつたか、とにかくそれから座長指名の下に各人ユーモアに富んだ話を受け渡しをする。エデントン、ジーンズ、フラウラー、ストラットン、プランマー、ノックス・ショウ、ジャクソン——デングルは「いつも氣の利いた話をせねばならぬので苦になるが今日はそれでこんな小話を用意してきた……」といふ様なことで、ごく朗かな會合で後には各自席に入り交えて色々話しをするといふ仕組みのもので私もお蔭で大層愉快に一夜を過したことである。

パリ國立天文臺（佛國）

パリ國立天文臺も今ではデュランス地方へ引越した譯であるが、自分が訪問した時分にはまだ市内アラゴ通りのものが活動中の筈であつた。生憎臺長さんは御留守。立關子がさびしく居た丈けで別に觀測者といふ程の人も居なかつたので持つて來た紹介狀もその先生に預けて、とにかくそこいらを案内

して貰つた。廣間には所狭いまで色々な標本類が置いてあつた。望遠鏡は臺長の御許しがないといふので、自分は勝手に裏庭へ飛び出して寫眞をとろうとするとそれも「臺長の御許しがないといけない」といはれて甚だガツカ

ル
ベ
リ
エ
ー
の
像



りした。よく京都あたりで御庭拜觀にいつて寫眞を禁じられた様なそんな氣がした。その足で直ぐ近所のプラン精密機械會社へいつた。プラン君愛相よく迎へてくれたが細かい話になると私の下手なフランス語と先方の下手な英語で半人前の話しも出来ないのに悲觀した。

ルベリエーの寫眞は門を這入るとすぐにあるので玄關子の文句をきかぬ前にとつたものである。

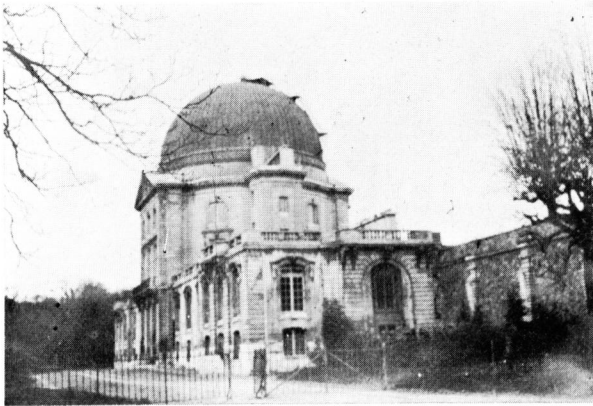
パリ大學天文臺（佛國）



パ
リ
大
學
天
文
臺

パリの學生街所謂カルチエ・ラタンをそぞろ歩いてソルボン大學の附近に
來たときに目にとまつたのが寫眞の天文臺，訪問もせず失禮して終つた。

ムードン天文臺（佛國）



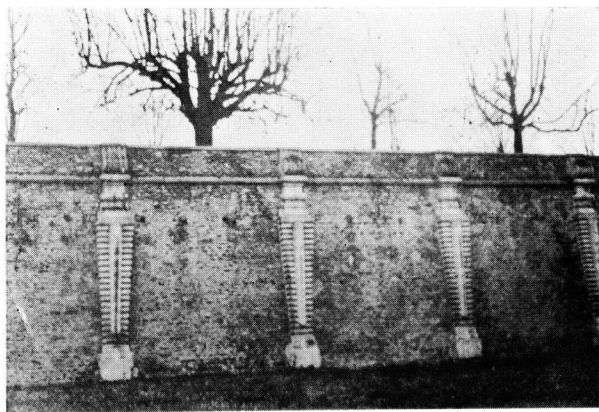
ムードン
天文臺

パリを去る頃は例のマロニエの芽をふいてゐる頃であつたが、このムードンへ出掛けた日ももう春らしい香が道端から感ぜられる頃であつた。モンパルナスの停車場から汽車でムードンまで出掛け、そこで天文臺はと聞くもう直ぐだといはれたので歩いたが相當の道程があつた。しかしその田舎びた様子が今は夢の様に思ひ出される。

天文臺は誠に景勝の位置を占めてをり如何にも昔は城でもあつたものゝ

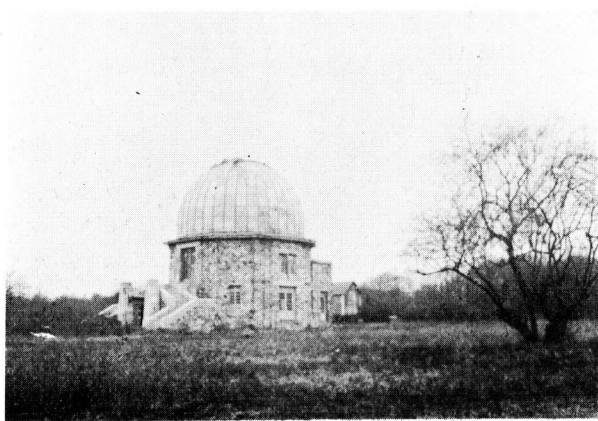
天文臺官舎





異色のある高堀

ジャンセン像



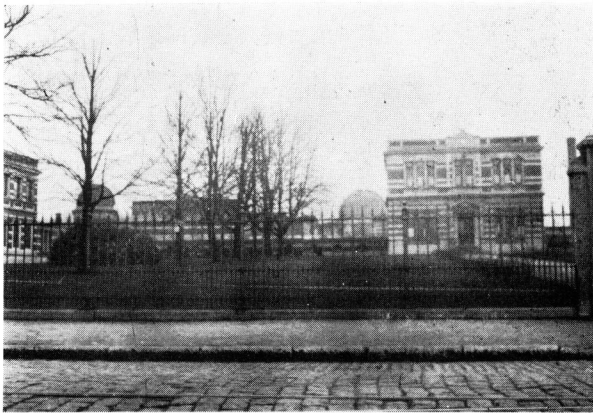
高地の天文臺

様に見受けられた。門の手前にある長屋然たるものが観測者の内だと通りがかりの人にきいた。門を這入ると右手が寫眞の様な高塀があるので實は大分疲れてゐたが階段を上つて見ると向ふは一體の高地になつてゐて、正に異色のある天文臺敷地だと思つたことである。

しかし實をいふと歸りの汽車に氣がせかれるし、その上下手なフランス語をボツリボツリはもう閉口と思つて割愛して直ぐ引返した。田舎氣分を味はつたのとジャンセンの坊さん風の像を見るだけで満足したことである。パリへ歸つてくると明が見える頃であつた。

ウツクル天文臺（ベルギー）

パリからブルツセルへ立つて來たのは3月中頃であつた。ブルツセルの豫定したホテルが北停車場附近だつたので、それへ着くまでに市内は一應見物した様なものである。宿へ家内を残して置いて自分はウツクル天文臺へ出掛けていつた。そこで地圖を買つて電車にのつたが町の城壁にそつて走つた後アチコチと廻りまわつてゆく電車は相當まち遠しかつた。臺長は留守であつたが Vanderlinden 氏が案内してくれた。グラブの寫眞望遠鏡は手頃で誠にあつかひ易くドームの工合から全ての裝置が都合よく出來てゐる様に思へた。



ウツクルと聯想の深い時計室も見せてくれたが、恒温裝置としては數個のランプを使ふのみで、例の冷却裝置は全く使用せぬさうである。こゝで時計の比較をするのに自働的にやるのを面白く見て來た。子午環室では環の讀み

取りを寫眞でとるのも見せられたので色々カスを述べると、まあやつと是れだけになつたのだとのことであつた。

尙ほ一臺ゴーチェ・プランの子午環が來るとかであり 又赤道儀室が今建築



中で仲々國立天文臺とはいへユトリがあるのに美ましがらされた。厚く禮をのべて歸宿した。

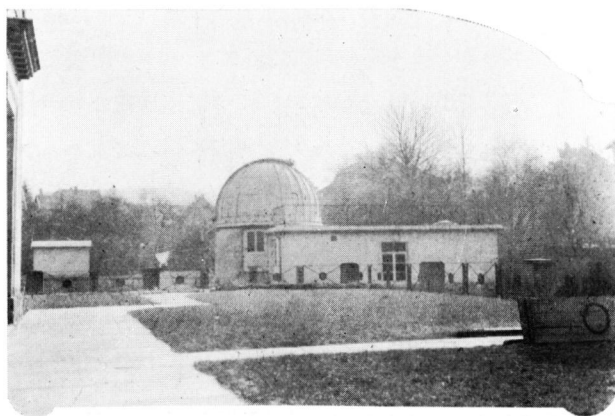
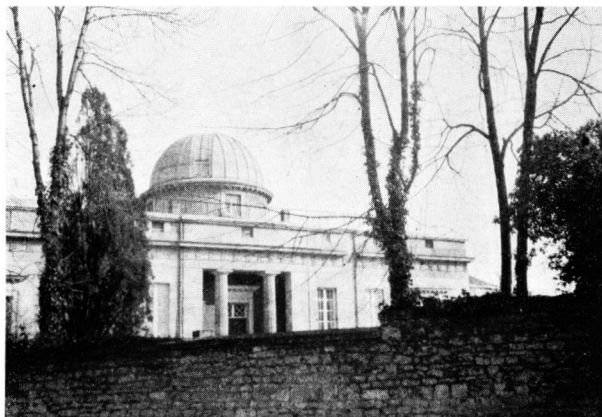
ボン大學天文臺 (ドイツ)

ブルツェルからケルンまで汽車で來て家内を宿に残して 夕方電車でボン大學の所在地までいつた。暮れゆくライン河に沿つて走つたが向ふへ着いた時にはもう眞暗だつた。驛を出てすぐ教へられた所までいつたら表に植物園とか何とか出てゐた。又道をきくともつと向ふだといふので其儘いつたが一向天文臺らしいものもない。變だと思つたら一紳士に出會ひ、向ふにはステンワルテとかいふカフェがあるが本當の天文臺は私の行く方だといつて元來た方へ連れていつてくれた。見落したのも道理で一す普通の邸としか見えず、鐵門堅くとざしてゐた。ベルを押すと守衛の様な男がカンテラ下げて出て來て、まだ夜の觀測者は出て來ず誰もゐないといふ。しかし事情をのべて外まわり丈け案内して貰つた。赤レンガの菅笠みたいな頂をしたドームが特異性を示してゐた。ケルンで一泊し翌日家内をベルリンに向けて送り出し、自分丈けで別途ゲツチンゲンに向つた。

ゲツチンゲン大學天文臺^臺（ドイツ）

ゲツチンゲンへ汽車がついたのはもう大分遅かつた。驛員にどのホテルがよいかと尋ねたら何とかいふホテルがいゝといつて丁度客引きに来てゐた男を呼んでくれた。何流の宿か知らぬが田舎町だなといふ感があつた。翌朝天文臺へ出掛けていつたが極くもう小さいところだが、臺長キーンレ氏と若い

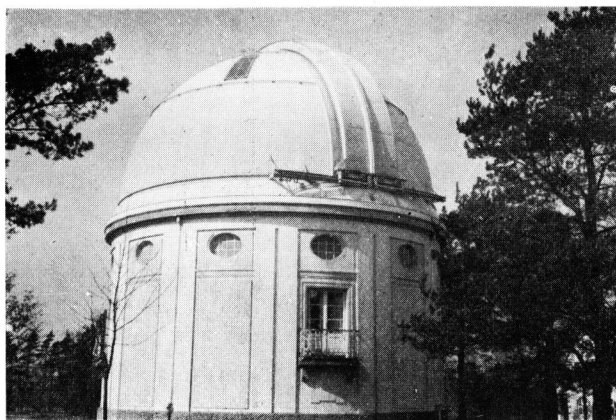
ゲツチンゲン大學天文臺



ヘツクマン博士の好意で設備を見せて貰つた。bolometric測定に必要な標準光度に關する考案を見せられたが、つもりは好いが仲々六ヶ敷しからうと思つたことである。それをやつてゐるドームがこれで、直ぐ接近して官舎があることも何か干物が飜つてゐるので知られるであらう。後の山の上に塔様のもの

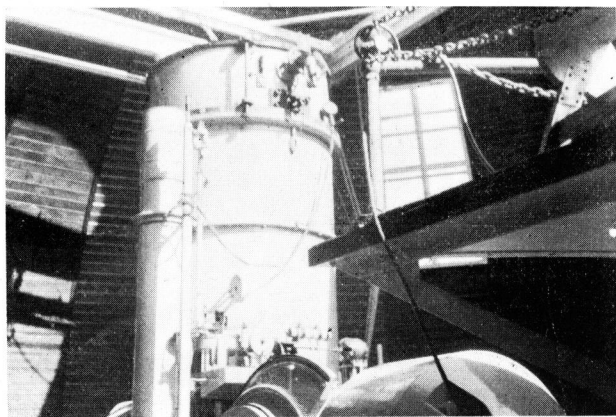
の見えるのが地球物理觀測所ださうで、天文の觀測所は別の山にあるといふ様なことであつた。

ハンブルグ大學天文臺 (ドイツ)

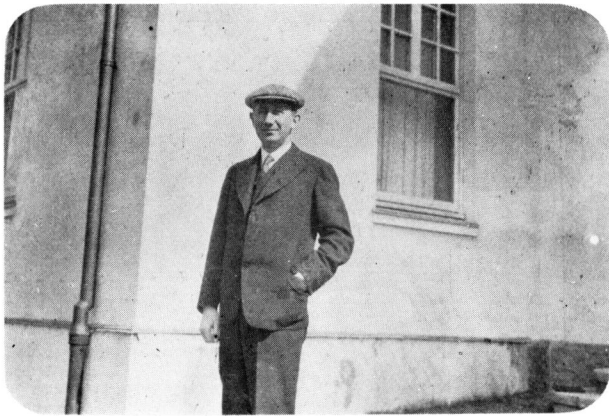


ハンブルグは流石に大きい都會である。自由市であるといふことは昔中學で習つたことだが、もう少しハッキリした概念を得たいと思つて汽車の中で色々な人に話しかけて見たが要領を得なかつた。尤も汽車勉(?)では腹がフクレぬ道理である。エルベ川のトンネルも渡つて見、サン・パウロ街など歩いて見、翌朝ベルゲドルフへ汽車で出掛けたものである。丁度日曜で若い者が大勢遠足姿でのつてゐて汽車もギツシリだつた。天文臺へいつてシオル臺長宅

一
メ
ー
ト
ル
反
射
鏡



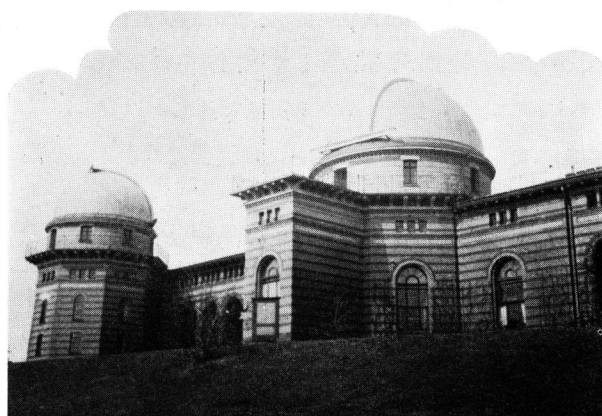
を尋ねたら、ハンブルグ大學の何かの式にいつたとのことでお嬢さんが出て来て接待せられた。バーデ氏に紹介せられ詳しく案内せられたのである。私の名刺には英語でかいてあつたゝめかゝキナリ英語で話しかけられ、今年の冬の御天氣の悪かつたことから、日本でのエロスの觀測だの色々話しがあつた。又何の發見でも自分は二つの乾板によつて確かめられたものとか、明かにさうだと認められるといふもの以外には發表しないなどいふ話しもあつた。よく色々な寫眞に出てゐる一メートル反射鏡から子午環室、各研究室など物語りながら案内してくれた。レプソルドの會社は今絶えたがそこにゐた熟練工が今天文臺にゐるので器械製作に大變都合がいゝことも話されて美ましく思つたことである。『今年の秋にはウキルソン山へ行く筈になつてゐる』などいつてゐたがその通りアメリカにゆかれた。世界人とでもいふのだらう。



バー
デ
氏

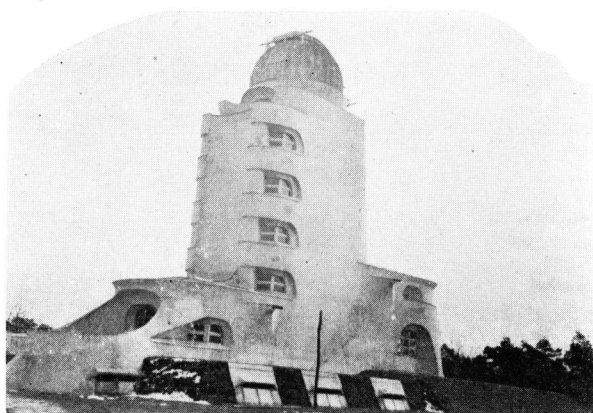
ボツダム天文臺（ドイツ）

ベルリンから電車でボツダムまでいつて自動車で天文臺の門までゆくと、丁度門の傍で立話してゐた大兵の人が立去つてゆくのが私には臺長ルーデンドルフ氏と直感せられた。門衛風の男に話すとすぐ臺長を呼びとめてくれその儘天文臺へつれていつてくれた。暫く應接間で種々話があつた上案内のため若い研究者を紹介せられた。實に懇切に案内せられたが名前を逸して誠に残念に思つてゐる。本館屋上残んの雪の上に小望遠鏡を持出してあれがサンスーシの宮殿であるとか、こちらの煙つてゐる方がベルリン市街である、又



ポツダム天文臺本館

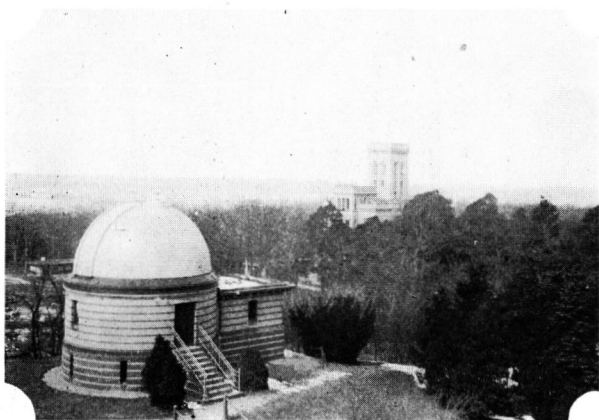
アインスタイン塔



小ドームとアインスタイン・カメラ



測地觀測所

氣象塔の左に
サンスーシ宮殿を望む

この方向にバーベルスベルヒがあるといつた工合だつた。又どれかの望遠鏡についてこれで視野が何の位でせうときくと 2° ばかりといふ返事なので 10° ばかりありさうながといへば直ぐ計算してみて左様々々といふ熱心さであつた。

更にアインスタイン塔の方へ案内してくれ、塔の上下を見せてくれた後にフロイントリヒ教授室へ連れていつてくれた。そこで居合はせたクリウベル氏共々日本へいつた話から日本のアインスタイン塔はどうなつたかななどの話が出た。いや仲々一つの天文臺がその能力を發揮するまでには相當の時日がかかるものですよといふ譯だつた。

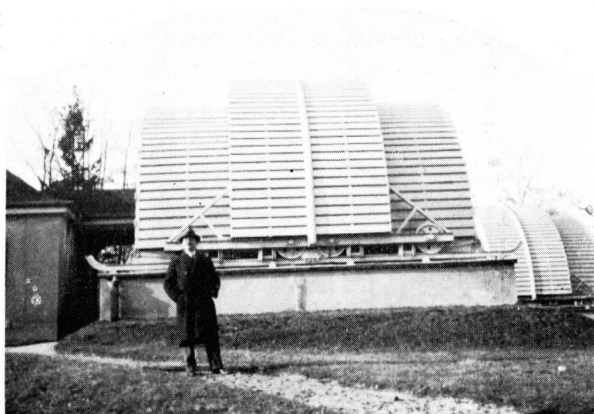
横倒しになつた鳥居の柱の様なものは日食時に於けるアインスタイン効果を

觀測のため用ゐたものである。林の中にあるのは一寸風變りなので寫してみたがこれは測地關係の觀測室である由。重力の絶對測定をしたのはこの場所であらうと考へたことである。

バーベルスベルヒ天文臺 (ドイツ)

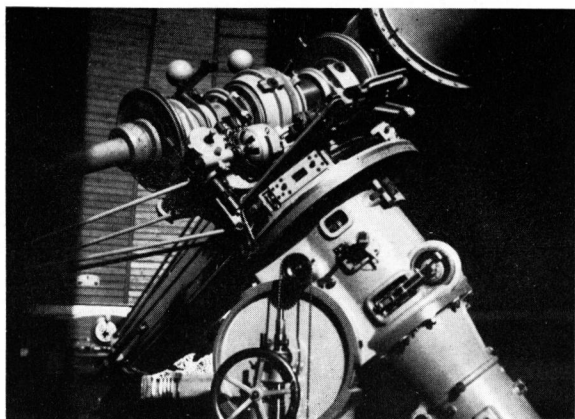
ボツダムからの歸るさバーベルスベルヒ天文臺を訪れ、ストルーベ氏に面會した。全く人のいゝをぢさんといふところである。アメリカでは貴方の甥御オットー氏に會つたが代々天文家として有名な御家柄でなどいふと、ハアこの天文臺も私の父が建てた譯でといふ様なことであつた。

子
午
環
室
と
教
授



最初英語と獨逸語とどちらがいゝかとのことで、それは英語が樂ですとい

六
十
五
セ
ン
チ
望
遠
鏡



ふと英語で御話し下される。そして判り難くて獨逸語を使ひかけると、イヤはつきり云つてくれれば解るからとの仰せに全く恐縮して終ふ。それから方々案内して呉れ、カマボコ

形子午環室や、大赤道儀、反射望遠鏡を見せて貰った。赤道儀の臺が土壇の様な様子をしてゐて少々氣になつたが、どこでも概して赤道儀の臺は割合無雑作に作られてある様に思ふ。反射鏡は銀鍍金のために取り外した儘になつてゐたが、他所では大抵一日で銀鍍金は済ますものだがなどと甚だ失禮なことを思つたのである。途中で臺長グトニツク氏に紹介せられ挨拶した。歸り



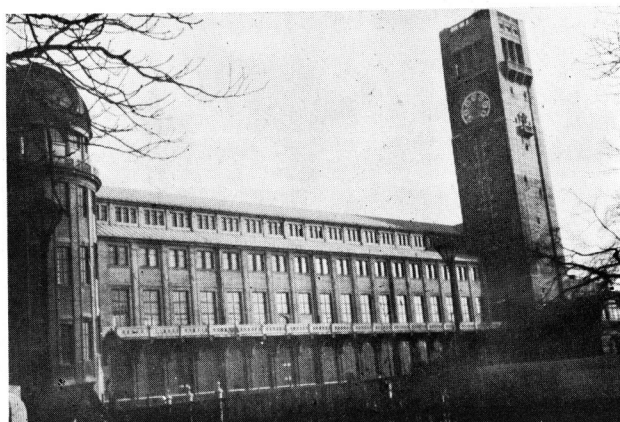
に自動車の便を氣にしたがまア上れとまたストルーベ氏の御宅にさそはれて御茶をよばれて色々とお話した。家内も御訪ねしなかつたことが大分残念さうにいはれて大に恐縮した。そして論文別刷など色々ともらつて都合よくバスに間に合ふ様送つて貰つて別れを告げたことである。

トレプトウ天文臺（ドイツ）

ベルリンを立つ前の日トレプトウ天文臺を訪問した。電車でカタリコトリと大分永い間ゆられたので全く待ち遠しかつた。只その露座の望遠鏡のグロテスクな様子を氣を引かれたのでわざわざ出掛け次第である。入口には電燈で星座を示してあつたり、中は小博物館風で勿論俗っぽいものではあるが相當觀覽者があるらしい。入場料は1マルクである。傍の講堂では天文の活動寫眞をやつてゐたがもう御免を蒙つて歸つてきた。

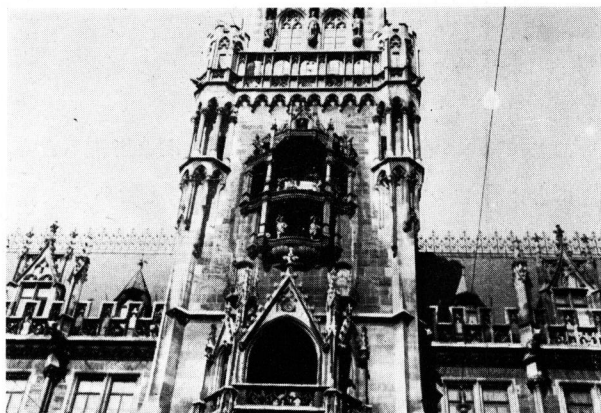
獨逸博物館天文室（ドイツ）

ミュンヘンの獨逸博物館には屋上に一對のドームを持つてゐる。一方はツ



ドイツ博物館

アイス望遠鏡と他方はゲルツ望遠鏡である。ツアイスの方を見たが一般観覧者むきに都合よく踏臺が動く装置になつてゐるのが目についた點である。圖の左端のドームがそれである。右方の角塔は氣象塔である。ゲルツの望遠鏡といふのは今迄餘り聞かないと思つたがまだ完成してゐないのだそうなる。



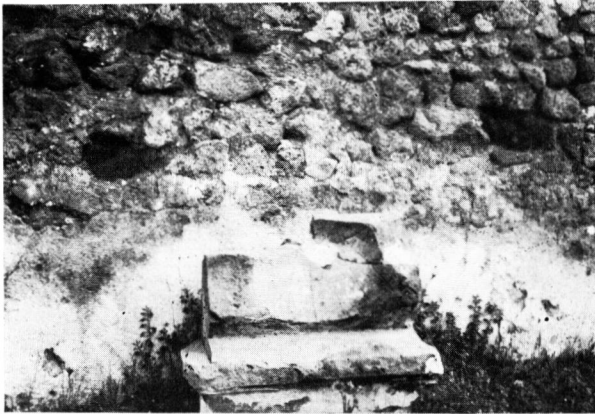
ミュンヘン市役所時計臺

ミュンヘン市役所の建物にある人形行進の塔時計は珍らしく思つたが、その動く時刻を見外づして終つて誠に残念である。

アルチエトリ天文臺（伊國）

滯米中この臺長アベツチ氏夫人から手紙を貰つて是非來訪する様にとのことであつたが、實は豫定出來なかつたのでついつい返事を怠つてゐた。フ

ロレンスへ来て見物の後に一友人と家内共々散歩してゐると向ふの山に天文臺がみえる。通りがりの男にあれは天文臺かとイタリア語できくと向うは英語で返事をする。變だと思つたら英國人だつたのだそうで大笑ひ。それがアルチエトリ天文臺であつた。丁度臺長夫妻ともお留守で、留守居のバアさんに訪問のことを話して歸りかけると可愛い小供がついてくるので東洋人が珍しいのだらうと思つてカラカヒ半分例のイタリア語で話しかけると、“Do you speak English?” とハッキリした英語でいはれて全くビックリした。これがアベツチ氏の愛な息子であつた。歸り途中で臺長夫妻に會ひ引返して色々見せて貰つた。お得意の塔望遠鏡を詳しく拜見、それから本館へいつてガリレイの觀測帳など珍らしく見たことである。本館のドームは誠に珍形で丁度



ボンペイの日時計

桶をふせた様なのは珍らしく思つたことである。夫人は中々ハキハキした人でアメリカの話など色々ありイタリアー家庭の様子など見せて貰ひ家内など大喜びで、親切なもてなしに氣をよくして宿へ引き上げたことである。

ローマへいつたとき **ヴチカン天文臺**を丘の上から眺めたがそれ丈けで御免蒙むつて終つた。尙天文に關係があるといへばボンペイへいつた時發掘物の中に寫眞の様な日時計があるのを面白くみたことである。